

平成 22 年度

越前おおの地域づくり交付金事業

各地区実施報告書



平成 23 年 4 月

大 野 市

目 次

1	大野地区まちづくり推進協議会	1
2	下庄をよくする会	5
3	乾側をよくする会	8
4	小山をよくする会	11
5	上庄をよくするつどい	16
6	富田地区むらづくり運動推進協議会	21
7	ふるさと阪谷をよくする会	25
8	五箇地区むらづくり推進協議会	30
9	和泉自治会	35

大野地区まちづくり推進協議会

1 基本データ

- 地区名 大野地区
- 人口 14,937人
(平成22年9月1日)
- 面積 6.3平方キロメートル



亀山の頂に建つ越前大野城

○ 地区の沿革

大野地区は、大野盆地の北西部の平坦地に位置し、東は上庄地区に接し、南は小山地区と上庄地区、西は乾側地区と小山地区、北は下庄地区に接していて、政治・経済ともに大野市の中心である。

古代より中世初期にかけては、政治経済の中心は小山地区や乾側地区にあり、大野地区は荒涼とした原野に数村が所在していたと考えられている。

中世中期には、亥山城（現在の日吉神社付近）の周辺に小規模な城下町が形成されていたが、今から430年前、天正期に金森長近が大野城を築城し、新しく建設した城下町が大野地区中心部の街区や用排水路の原型となっている。

明治4年の廃藩置県により大野藩は大野県となったが、その年のうちに福井県、足羽県と

めまぐるしく変わった。県名はその後も明治6年に敦賀県、明治9年に石川県と変遷したが、明治14年に再び福井県となって現在に至っている。



名水百選「御清水」

足羽県地理誌によると、廃藩置県当時の大野地区は戸数2,083戸、人口9,052人であった。

明治22年の町村制施行により、5つの小区がまとまって大野町が誕生した。大野町は、昭和29年の町村合併により大野市の一地区となって現在に至っている。



400年の歴史を誇る七間朝市

○ 実施主体

大野地区まちづくり推進協議会

2 現状と課題

大野地区は、亀山にそびえる越前大野城、基盤目状に区切られたまち並みや寺町通り、城下

町誕生のころから続くとされる七間朝市など、400年を超える歴史の昔日を彷彿とさせる景観を今も色濃く残している。

広大な森林を持つ本市は湧水が多く、当地区には名水百選にも選ばれている「御清水」をはじめとする湧水地がいくつもあり、古くから地下水を生活用水として利用してきた。この地下水は、現在でも多くの家庭が飲み水などに利用しており、この地ならではの豊かな水文化を育んでいる。



平成の名水百選「本願清水」といよの里

当地区の「歴史・文化・伝統・水に育まれた城下町」を魅力として、市ではまちなか観光を推進しており、当地区への観光入込み客数は増加傾向にある。



400年の歴史を誇る七間朝市

しかし近年、車社会の進展や大規模小売店舗の

郊外立地に伴って、人口が市街地から郊外等へ流出しており、市街地では商業活動の衰退、後継者不足等により空き店舗や空き地などが増加している。

こうしたことから、市では平成20年度に中心市街地活性化基本計画を策定し、交流人口の増加、居住環境の向上、商店街の活性化などに取り組んでいる。

一方、当地区は区域の大半を市街地が占め、また城下町を中心に発展した歴史などから、他地区のような「むら社会」の側面が無く、地区住民の多くは「大野地区民」としての連帯感、責任感が希薄であり、まちづくり活動への参加意識も極めて低い。

以上のようなことから、本年度は地区住民の連帯感の醸成と来訪者へのホスピタリティ向上を課題として取り組むこととした。



寺町

3 事業の内容

前項で記述の現状と課題を踏まえ、協議会内部での議論を重ねた結果、本年度は、「住民相互のコミュニケーションの向上と連帯感の醸成」、「観光客など来訪者へのホスピタリティの向上」をコンセプトに「町中花いっぱいロード創出事業」を展開することとなった。



花づくり学習会

事業の内容は、「各戸にプランター、培養土、花苗を配布し、住民総参加でみんなが見える街路に面した軒先などで栽培管理をする。」と、いたってシンプルなものであるが、地区内73区、5千余戸を対象に周知し、参加希望を把握し、資材を配付するということは、大変な労力の要る事業であり、まちづくり推進委員のほか、区長をはじめ班長など行政区組織の協力があって実現できた事業である。



4 事業の成果

まちづくり推進委員のほか、区長をはじめ班長など行政区組織の協力の下、地区まちづくり推進協議会会員の53.6パーセント、2,236戸の参加を得ることができた。

地区住民は、花いっぱいになるであろう地区の町並みを思い描き、これからの栽培管理に意欲を燃やしている。

このように多くの住民が1つの目標に向かって活動を行うことは、今後のまちづくり運動の活性化につながっていくものと期待できる。



5 今後の展望

大野地区では、中心市街地活性化基本計画や亀山整備計画、水のみえるまちづくり計画など市が直接手がける事業が種々計画されており、この交付金事業に取り組むに当たっては、地区の役割を明確にしていく必要がある。

今後は、市との連携、調整をさらに図りながら、当地区の魅力「歴史・文化・伝統・水に育まれた城下町」に磨きをかけるような事業に取り組んでいきたい。



名水百選「御清水」

8月24日	常任委員会（制度の概要説明、事業計画策定の進め方について他）
9月10日	常任委員会（提案された14の事業案を協議）
10月2日	役員会（現地調査、実施事業内容の検討）
11月5日	役員会（臨時総会の議案等について協議）
11月20日	常任委員会（臨時総会議案を成案）
11月20日	臨時総会（事業計画承認）



臨時総会

6 その他

大野地区まちづくり推進協議会における本年度事業計画策定の経緯

月 日	内 容
8月2日	役員会（市から制度の説明を受ける。）
8月12日	役員会（事業計画策定の進め方等について協議）



下庄をよくする会

1 基本データ

- 地区名 下庄地区
- 人口 9,255人（平成23年1月）
- 世帯数 2,910世帯（平成23年1月）
- 地区の沿革

下庄地区は大野市の北西部に位置し、昭和29年に2町6ヵ村が合併して大野市が誕生した時に、下庄町も大野市に編入されました。当地区は勝山市と隣接していて、奥越地区全体からみると中心地域として、県立高校、警察署、土木事務所、奥越合同庁舎、健康保養施設（あつ宝んど）、郵便局等の官公庁等が集中しており、近年、複数の新たな商業施設も立地しています。また、中部縦貫自動車道の大野ICも当地区に建設され、国道157号大野バイパス（東縦貫線）も建設されています。

- 実施主体

下庄をよくする会

2 現状と課題

- 現状

- ① 地区内は、農家、非農家が混じり合っています。
- ② 地区の各区、各団体は、既にさまざまな地域づくり事業を、活発に行っています。
- ③ 新たな幹線道路、商業施設等に隣接した堂本、南新在家等では、区民が地場野菜の販売所を開くなどの新たな取り組みが見られ、その他の地区でも、矢の公園整備、陽明町の不動明王と御堂建替事業などの地域づくり事業を行っています。

- 課題

- ① 地区内においては、新たな幹線道路、商

業施設等に隣接し、人の往来が多くなる地域と、現状では人の往来の増加を望めない地域があり、堂本、南新在家のように地場野菜の販売所を区内で開くことが可能な地域と、困難な地域があります。

- ② 毎年10月に「下庄まつり」を、下庄公民館にて開催しています。平成22年は約900世帯・3,000人が訪れています。



まつりでは、地場野菜を販売する「青空市」及び、地区民がテントスペースにて不用品等を販売する「フリーマーケット」を行っていて、好評を博していますが、年1回のみ開催となっています。



- ③ 「下庄をよくする会」へは、地区内33区において「地区推進委員」を選任してもらい、委員として参加していただいておりますが、会議や活動への参加が低調な状況で

あり、一部の委員に大きな負担が掛っています。

3 事業の内容

地区の農林産物等の生産を拡大するとともに、地区民の交流を促進し、農林業の振興と地域活性化に資するための拠点施設を整備するとともに、地区推進委員に大きな役割を持ってもらって、積極的な参加をお願いし、定期的に地場野菜を販売する「青空市」、不用品等を販売する「フリーマーケット」を開催する予定です。

4 事業の成果

① 下庄公民館南側の敷地に、「青空市」「フリーマーケット」を開催する拠点を整備しました。



② 地場野菜の販売等についてのノウハウを学ぶため、奈良県明日香村での視察研修を実施しました。



③ チラシ、機関紙「下庄しるべ」等を通じて、拠点施設の名称を公募するとともに、農産物の出品者を募りました。施設の名称は16名の方から21件の応募があり、選考の結果、拠点施設の名称を「下庄青空市」に決定しました。農産物出品希望の方の応募も徐々に増えてきています。



5 今後の展望

平成23年度は、早い時期に、レジ・パソコン・販売システムソフト・ラベルプリンター等の必要な備品を購入し、引き続き活動体制を整備していきます。

まずは、平成23年6月頃から定期的に地場野菜を販売する予定です。

また、時期をほぼ同じくして、公民館敷地の市道を挟んだ南側に、大型スーパーマーケットの新規開店が予定されており、人の流れが更に多くなることが予想され、スーパーマーケット

との相乗効果を期待しているところです。

平成 24 年度中には、所期の目的である

- ① 地場野菜の販路拡大と地区民への提供
- ② 地区民の交流
- ③ 地区推進委員の積極的参加を促すことにより、新たな人材を発掘し、「下庄をよくする会」の持続的発展を確保する。

に資する一定の成果を上げることにより、中部縦貫自動車道の開通を見据えた中での、地域活性化につながるよう努めていきたいと考えています。

乾側をよくする会

1 基本データ

- 地区名 乾側地区
- 人口 1,062人
(平成22年7月1日現在)
- 面積 10.51k㎡
- 地区の沿革

乾側地区は、市街地の西部に位置し、地区西端にある花山峠を境に福井市に接し、地区中央の東西を国道158号線が横断しており、大野市の西の玄関口となっている。

8集落からなり戸数約230戸で、酒米と種籾産地として有名な純農村地域である。

- 実施主体
乾側をよくする会

2 現状と課題

乾側地区は縄文時代から人々が住み始め、大野でも最初に開けた場所のひとつである。弥生時代や古墳時代には牛ヶ原を中心に大きな力を持った豪族が現れ、乾側地区内に多くの墓や古墳が作られた。中でも牛ヶ原の山ヶ鼻古墳群には奥越で唯一の前方後円墳があり、鉄剣や貨幣(和同開珎)も見つかっている。なお、大野盆地内の古墳のうち6割以上が乾側地区に集中している。

また、稲作が始まり、奈良時代には寺や貴族・豪族の土地である荘園が発達したが、牛ヶ原の荘園は、奈良時代には奈良東大寺領、平安時代には京都醍醐寺領として、今の大野市街地の北半分にまで広がっていた。その牛原荘には後に牛ヶ原城が築かれ、三社神社が建立された。なお、尾永見区には、稲作に縁の深い雨乞い踊りが無形民俗文化財として継承されている。

さらに、南北朝時代に築かれた戌山城は、金

森長近によって越前大野城が築かれるまで、戦国時代の激動期を含め200年余りの間、大野とその周辺地域を治める斯波氏、朝倉氏の居城として、県内2番目の多さの畝堀数と奥越最大の規模を誇る山城であり、一乗谷城の東方面の軍事拠点として重要な役割を果たしていた。

このように、乾側地区は古来、大野盆地の中でも最も歴史と伝統のある地域であるが、地域住民自身はその認識が薄いのが実情である。

3 事業の内容

① 史跡説明会

目的 地区民自らが史跡を整備・継承していく事業に取り組むに当たり、まずは史跡についての理解を深める。

日時 11月27日(土) 午後7時～9時
参加者 小学校3年生から80歳まで、約60名が参加

講師 大野市教育委員会文化課

佐々木係長

内容 石器や土器、古墳群、牛ヶ原荘園、牛ヶ原城、三社神社、雨乞い踊り、戌山城





② みくら清水周辺整備

目的 戌山城址の整備の一環として、まずは、その登山口にあたるみくら清水を清掃・修景整備し、駐車スペースも確保する

日時 12月1日(日) 午前9時～正午

参加者 地区民約30名が参加



③ 雨乞い踊り備品整備

目的 市の無形民俗文化財にも指定されている雨乞い踊りは尾永見区の保存会と乾側小学校児童が踊りの継承に取り組んでいるが、太鼓・笛・法被などの必要備品を整備し、継承の取り組みを支援する。

内容 締め太鼓 2基
 締め太鼓用台 2台
 篠笛 2本
 法被 15着



④ 史跡案内・説明看板整備

目的 史跡の案内看板、説明看板を設置することにより、史跡についての理解を深めるとともに、史跡の保存・継承を促進する。

内容 戌山城址案内看板

1枚(登りに設置)

牛ヶ原城址・三社神社案内看板

1枚(登りに設置)

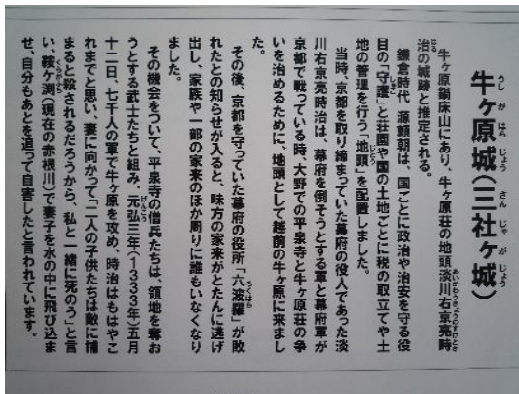
牛ヶ原城址由来説明看板

1枚(現地に設置)

三社神社由来説明看板

1枚(現地に設置)





4 事業の成果

乾側地区の歴史や史跡に対する興味関心が高まり、理解が深まった。

3月の乾側地区各種団体役員等懇談会の席上で乾側小学校児童が揃いの法被を着用して雨乞い踊りを発表し、無形民俗文化財の継承が促進された。

5 今後の展望

来年度以降は、史跡に触れる機会を増やすことを目的として、牛ヶ原城址・三社神社跡地への登山道整備を実施する。

また、戌山城についても、みくら清水～戌山城～飯降山接点の登山道を整備するとともに、上丁～向山(戌山城と飯降山接点との中間地点)の新規登山道を開拓・整備する。

なお、雨乞い踊りについては、城まつりや文化祭、敬老会などの機会を捉えて多くの発表の機会を持ち、継承の取り組みを活発化する。

小山をよくする会

1 基本データ

大野市小山地区は、平成 22 年の人口が約 2 千人、世帯数は約 650 戸。15 の集落で構成される緑豊かで自然にあふれた農村地域です。

面積は、東西 2 キロメートル、南北 4 キロメートルの約 8 平方キロメートル。その位置は、大野市の南西部、市街地に隣接し、大型ショッピングセンターなどの商業施設が立地しています。



赤枠で囲われたところが小山地区

その歴史は古く、地区内を南北に縦断する赤根川流域を中心に縄文時代から人が住み着いており、大きな勢力を持っていたと思われる豪族の古墳がいくつも存在しています。

平安時代には藤原氏の荘園となり、その後、京都の春日大社と深い繋がりを持ちながら、現在まで、地区有数の農村地帯として発展をきました。

地域の高齢化率は、平成 22 年 4 月 1 日現在で 24.7%。市内 9 地区の中で最も低く、高齢化率の上昇が懸念される昨今ではありますが、比較的若者が多い地域でもあります。

本事業の実施主体は、地区内全戸を会員とする小山をよくする会です。事務局を小山公民館に置き、地区内から選出された会長 1 人、副会長 2 人と、各集落の代表として選出された推進

委員 45 人で話し合いをしながら、明るく豊かで住み良い地域づくりを目指して活動しています。

2 現状と課題

小山地区は、区長会を中心とした地域住民のネットワークが確立され、恒例の事業について住民有志が関わって地域活動を行っています。

地域独特の事業としては、他地区の球技大会に代わって実施されている集落対抗バレーボール大会や地区老人クラブ「小山福寿会」により、市内の 300 名を越える園児を招待して行う「さつまいも掘り体験」、住民有志団体主催による「越坂ミニミニコンサート」「黒谷観音星の下コンサート」などがあります。



集落対抗バレーボール大会の様子

小山をよくする会では、地区民を対象とした夏祭りや秋祭り、花壇コンクールなどを行うほか、地域の伝統芸能である小山鉦踊りの保存・継承活動にも取り組んでいます。



小山まつりで披露される小山鉦踊り

また、ここ数年は、地区住民を中心とした新

たな任意グループが、地道な活動を通して地区の歴史資料を調査しています。

平成22年、越前大野城築城430年祭を契機に、調査した歴史資料を展示資料として加工し、広く一般に公開する「小山の里特別展」を開催しました。



小山の里特別展

小山地区では、このような活動を通して、地域コミュニティづくりが行われています。

しかしながら、少子化により、地区の子どもの人数の減少による小学校存続の課題や、一部振興住宅地域での、新住民と旧住民との融和の課題などが年々顕著になってきています。

これらの課題を解決するためには、地区住民が自分の住む地域を好きになり、守り育てていくという住民意識の向上を図っていく必要があります。

これまで小山地区では、前述の様々な地域づくり活動は行われていますが、住民自らが誇りにできるほどの際立った地域特性を生み出せていません。住民が一丸となれるテーマが見つけられていないために、一丸となって地域づくり活動を行おうという機運の高まりもあまり見られないように思われます。

ふるさとを誇る住民意識の啓発を行うためには、住民すべてが共有できる地域テーマが必要となっています。

3 事業の内容

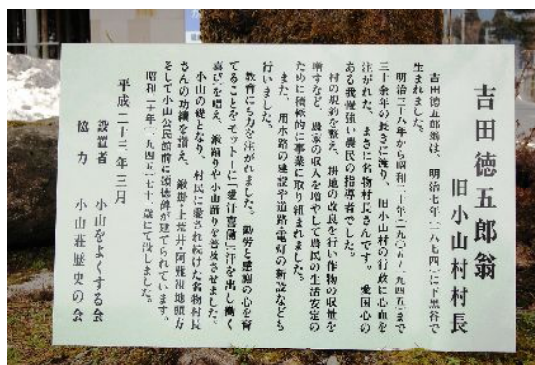
住民が一丸となれるテーマをどう創るのかを考えたとき、今回の事業のテーマである「歴史と文化を活用した地域づくり」を選びました。

現在、活動が活性化してきた歴史グループの協力を得ながら、地域の歴史と文化を今まで以上に知っていただく環境を整備していくことで、住民が地域のことを知り、それがまた、地域を大切に思う心の高揚に繋がるのではないかと考えています。

また、歴史と文化を発信する環境を整備することで、地域が注目され、地域外の交流人口の増加に繋がり、地域経済の活性化にも繋げていけるのではないかと考えています。

具体的には、歴史と文化の里づくり事業という名称で、史跡看板作成と視察研修事業、歴史講演会を実施しました。

史跡看板の作成においては、地区内の主な史跡の謂れを整理し、説明看板15枚を作成しました。



今回作成した史跡看板

計画当初は設置作業も今年度中に完了する予定でしたが、大雪のため、次年度に地区住民の手で設置することになっています。

また、小山地区の歴史に関わりの深い飛騨市神岡地区や高山市、下呂温泉、郡上市郡上八幡地区への視察研修事業を行い、1泊2日の行程に、地区内外から30人が参加しました。



視察研修旅行参加者の皆さん

4回シリーズで行った歴史講座は、将来、小山の歴史や文化について語る語り部の育成を目標に、縄文時代から現代に至るまでの小山地区の歴史や地区内の神社仏閣に関することについて学べる内容とし、各回にそれぞれ約30人、延べ120人余りの参加をいただきました。



第1回歴史講座（縄文～室町）

また地域コミュニティ支援事業と称して、小山地区内15集落に地域づくりの機運を高める



阿難祖地頭方に設置した揭示板

ための啓発看板の設置を呼びかけ、集落ごとに協議をいただき、看板を設置しました。

結果、8集落で、住民の方に設置作業を行っていただき、住宅看板や揭示板等を設置することができました。

4 事業の成果

① 歴史と文化の里づくり事業

史跡看板の制作においては、これまで、地区の史跡を普段から意識していただける環境がありませんでしたが、これで、主な史跡については、普段から小山地区の歴史に触れやすい環境を整えることができました。

視察研修旅行では、訪問地である神岡地区において、小山荘にあった面谷鉦山を開発した糸屋彦次郎の功績を肌で感じるとともに、大野に似通った共同水屋を視察できました。



神岡地区の共同水場



素玄寺にて説明を聞く参加者

高山市では、高山市郷土館の田中主任の説明により、前述の糸屋氏と大野を治めていた

金森家との確執の話を伺うとともに、金森家の菩提寺である「素玄寺」等を訪ることができました。

下呂温泉では、飯降山で修行をしたと言われる泰澄ゆかりの彫刻師「円空」の仏像展示を観覧。



展示されていた円空仏

郡上八幡においては、郡上市文化財保護委員の高橋氏から郡上八幡と小山荘との関係について話を伺うことができました。



郡上八幡での講座

視察により、広域の中での小山地区の歴史的な位置づけについて知識を深め、ゆかりの地を参加者が肌で感じることを通じて、地域に対する誇りを醸成することができたように思います。

歴史講座では、縄文時代から現在までの小山地区の歩みを総合的に学んだことを通じて、地区の歴史に関心を持っていただくことができ、将来、小山地区の語り部になっていた

けそうな人材育成ができました。

全体として、当初の事業目的である「歴史と文化の里・小山」づくりに寄与することができたと思います。

② 地域コミュニティ支援事業

協議の結果、全集落で看板設置の取り組みをするには至りませんでした。すべての集落で、看板を設置するための協議を行っていただき、地域について改めて考えていただく契機を作ることができたと考えています。

また、新たな住宅看板や掲示板等が設置された集落においては、わずかずつではあります。長い期間を経て、看板が地域コミュニティの形成を啓発していくことと思います。

5 今後の展望

歴史と文化の里づくり、地域コミュニティの活性化とも、単発の事業ではその効果は薄れてしまいます。

「歴史と文化の里・小山」づくりを推進するため、今回設置した史跡看板を活用していくソフト事業を行っていく必要があります。今後、看板修繕のための見回り作業も含め、マップの制作や史跡巡りツアーの実施等を通して、地域の方が地区の歴史に触れる機会を増やしていきたいと考えています。

また、歴史講座など、地区の歴史について学ぶ機会を今後も提供していくとともに、地区の歴史を書物として後世に残していく取り組みを行っていく必要もあります。

地域コミュニティの活性化についても、集落での地域のことを考える機会を持てるような継続した取り組みを続けていきたいと思っています。

そして、交流人口を増加させるためには、事業で環境整備した地域の魅力を積極的に発信していくことが重要となるでしょう。

小山をよくする会では、これらの展望を持って、住民自らが地域づくりに取り組む機運を盛り上げながら、今後も頑張っていきたいと思えます。

上庄をよくするつどい

1 基本データ

- 地区名 上庄地区
- 人口 約4,200人
- 世帯数 約1,100世帯
- 面積 28,471 ㎡
- 地区の沿革

大野市は、昭和27年に2町6カ村が合併し市制を施行したが、6カ村の中の1つ旧上庄村が現在、上庄地区と言われている。

当地区は、32の集落（行政区）で構成されていて、地勢的には市街地南部に位置し、日本百名山の1つ荒島岳のふもとで、東西約6km、南北約12kmほどの広さを有している。地域は、一級河川の真名川と清滝川が作り出した扇状地形で、稲作とサトイモの生産が盛んな農村地区となっている。

○ 実施主体

上庄をよくするつどい

地区のまちづくり組織「上庄をよくするつどい」は、地区内の全世帯のほか、関係機関や関係団体で構成されている。その運営については、各集落から選出された運営委員があたり、総務部、環境整備部、教育福祉部の3つの専門部に分かれ、それぞれの部門の事業を行っている。

また毎年このよくするつどいを核として実行委員会を構築し、地区の夏祭りを8月の第1土曜に実施している。夏祭りは地区住民による手づくりで、地区公民館の駐車場を利用して各種の団体やサークルなどが、日ごろの練習成果を屋外ステージで発表、またおでんや焼きそば、焼き鳥、バザーなどの出店もあり、地区民からは夏の恒例イベントとしての楽しみの一つに挙げられている。

2 現状と課題

上庄地区では、地区を挙げて環境美化や里山等における広葉樹植栽など、環境保全のための活動に取り組んでいる。

環境保全の取り組みでは、毎年、初夏のころに、上庄をよくするつどいや女性の会（婦人会）会員などで地区内の各集落の環境美化の取り組み状況を巡回審査し、秋には各集落の花壇づくりやごみ集積所などの環境美化取り組みについてコンクールを行っている。

審査とコンクールでは、花壇づくりの工夫や管理状況、ごみ集積場の清掃、分別状況などに視点を置いて行っている。



写真1 初夏のころの環境巡視会

また地区では旧上庄村から受け継いだ広大な山林を有していて、地区の生産森林組合組織である「上庄共栄会」が、毎年、造林事業を行っている。

造林事業では、植栽や間伐、下草刈など杉の育林が主体であるが、近年、地球温暖化対策など森林の持つ公益的機能が重要視されている中、水源地の山林を有する上庄地区として地区を挙げて広葉樹の育林にも力を入れている。毎年初夏のころには、所有する山林にドングリ苗などを植樹している。

このほかにも地域にある圃場跡地（名称：エコフィールド）を利用して、小学児童にクルミ

の種植え付け、また中学生には松の植樹なども協力してもらっている。



写真2 児童によるクルミの種植え

これらの環境美化・保全活動については、よくするつどいでは、各集落での活動や取り組みについての啓発を主としており、地区を挙げての一斉的な協働活動は山林における広葉樹の植樹で大人だけの参加である。このため、地域の環境美化に対する意識を今後も継続的に保つためにも、世代間交流をも目的にして、これからの上庄を担う若い世代も含めた環境美化の協働活動が望まれる。

また祭りについては、実施環境（ハード的）が十分ではなく、イベント充実のための整備が望まれる。特に、祭りの雰囲気をかもし出す提灯や協力団体の出店には電気が不可欠であるが、会場となる地区公民館前駐車場では十分な容量が確保できていない。時に、盆踊りの最中に電気が落ちたりして、せっかく盛り上がった雰囲気が壊れたりしている。

また真夏の最中に、電気容量不足のため、飲み物などは氷を使って冷やしているが、十分な電力量が確保できれば、冷蔵庫や冷凍庫の使用などもでき、出店メニューが増えるなど祭りの彩りにもぎやかになることが期待される。そして、各団体のステージ発表にも照明などを使用でき一段と祭りは賑やかになるであろう。

3 事業の内容

① 地域環境整備事業

上庄地区内には小学校、中学校がそれぞれ1校ずつあり、生徒たちは中学校を卒業すると同時に上庄校同窓会員となる。現在会員の数は、1万人を超えている。

中学校敷地内の北東側には古くから赤松林があり、夏の暑いころなどには、生徒やPTA活動などでの憩いの場として利用されている。

以前に、中学校では校舎建て替え時に学校敷地内の東側にあるプールを取り壊した。しかしながら松林に隣接するプール跡地は市道沿いにあるが、コンクリート片や石ころなどが残っているため、近辺の景観が損なわれている。



写真3 景観を損ねているプール跡地

このため、上庄をよくするつどい会員をはじめとして、上庄校同窓会員、中学校生徒で、大人と子どもが、当該地を整備し、松苗を植樹するという協働作業に当たって、地域景観形成を図る。

近年、松くい虫被害により、アカマツの立ち枯れが全国に広がっているが、松苗には抵抗性のあるものを植えることとする。



写真4 松苗の協働作業による植樹

② 夏まつりグレードアップ条件整備事業

夏まつり事業においては、現在公民館や隣接するJA倉庫のコンセント電源を使用しており、電気容量的に十分ではなく、たびたびテント内の照明が落ちるなど、出店者や来場者から改善を求められており、イベント規模を拡充しようにもハード的に制限がある。

このため、その条件整備を行い、イベントメニューの充実を図るなどして祭り規模をグ

レードアップさせる。

公民館施設に電気を供給している電源は公民館南側の屋外にあるが、当電源は公民館供給以外にも余裕ある。この元電源を利用して、夏祭り会場となる公民館北側駐車場の東側と西側に1カ所ずつイベント用常設電源（配電盤）を設置する。

また既設倉庫に投光器を設置し、祭り時間の延長や来場者・イベント従事者、祭り後の片付け時の安全を確保する。

・電源設備設置

東ルート

既設の倉庫内に配電盤を取り付ける。

元電源～芝生地下埋設、公民館側壁取り付け、アスファルト埋設、倉庫内取り付け
西ルート

既設の屋外看板に配電盤を取り付ける。

元電源～芝生地下埋設、アスファルト埋設、看板裏取り付け

・投光器設置

ハロゲン投光器 3器



写真5 電源線の埋設工事



写真6 看板に取り付けられた配電盤

4 事業の成果

① 地域環境整備事業

松苗の植樹活動により、当該地の環境美化が図られるとともに、環境美化に対する個々の意識向上につながった。

また大人と子どもが協働作業をすることにより、世代間の交流や郷土愛の醸成が図られた。



写真7 事業地に建てられた環境美化を啓発する標柱

② 夏まつりグレードアップ条件整備事業

電源設置事業は、残念ながら事業の完成が夏まつり後となったため、今年の夏まつりで活用することはできなかった。

来年度以降は、夏まつりのイベント内容等グレードアップについて期待したい。



写真8 今年の夏まつり

5 今後の展望

① 地域環境整備事業

整備地は、今後、中学生や地域住民が協働して維持管理を行うとともに、地域の憩いの場として活用することとし、地域コミュニティの醸成がますます図られることが期待される。

また子どもから大人までの協働による景観形成事業の継続事業として、近隣のエコフィールドを利用して、継続して小学生によるクルミ等の種植えや苗木育成。また中学生や大人の協働による、上庄共栄会が所有する林地において、エコフィールドで育ったクルミ苗木の植樹活動につなげ、地域の環境保全のみならず、水源地である上庄地区からの地球環境保全活動の啓発などの発信につなげていくこととしたい。

② 夏まつりグレードアップ条件整備事業

「上庄夏まつり」は今年で21回目を数えたが、当事業により電源容量が確保等できたことにより、次年度からのイベント内容等を以下のように充実させていくこととしたい。

① 出店協力者団体の増によるグレードアップ

会場的に数に限度はあるが、出店協力者増による地域力の活性化と賑わいづくり。

② 出店メニューの増によるグレードアップ

冷凍庫や冷蔵庫、ホットプレートなどの電気器具使用による多彩なメニュー展開ができることから、子どもから大人までが楽しむことができる祭りのグレードアップ。

③ 祭り規模の拡大による来場者の増

④ 投光器設置によるグレードアップ

投光器を設置することにより、祭り時間の延長や来場者・イベント従事者の安全が確保できる

なお、上記夏まつりイベントのグレードアップを図るほかにも、当該地において上庄地区の特産品であるサトイモを活用したイベント開催など、屋外電気設備を活用した地域の賑わいづくりにつとめていくことを指標とした。

富田地区むらづくり運動推進協議会

1 基本データ

- 地区名 富田地区
- 人口 3,600人



- 面積 21.7k㎡
- 地区の沿革

富田地区は、東は九頭竜川、西は真名川の二大河川に挟まれ、日本百名山に数えられる荒島岳のふもとから、東西約4km南北約7kmに細長く広がる純農村地帯。

- 実施主体

富田地区むらづくり運動推進協議会

2 現状と課題

市民憲章を基調とし、富田地区の将来にわたって明るく豊かな地域の実現を図るため、地区民自らの手による活気ある地域づくりの推進に努めている。

しかしながら、各集落においては、区長を中心として様々な地域づくりに関する諸活動が行われているものの、広範囲に及ぶ富田地区全体としては、「花いっぱい運動」等の環境美化作業や「とみた夏まつり」以外には、主な地域づくり活動というものがなく、どちらかといえば、それらの活動が協議会としての一大行事でもあり、イベント終了後には活動が低調になってしまっている。



この状況を打破するため、他に何か地域が一体となるアクションが起こせないものかと日々模索しているところである。

3 事業の内容

去る8月4日、富田地区の12集落で構成する富田農地環境保全協議会が、国の「農地・水・環境保全向上対策事業」を活用し、生態系保全活動として富田小学校との連携により、生態系保全活動の一環として生き物調査を実施するため、富田公民館東側にビオトープを設置した。



ビオトープとは、いろいろな種類の生き物が、自分の力で生きていくことのできる自然環境を備えた場所のことで、子どもたちの環境教育や生活科・理科の学習の場として、また、命の営みと環境との関わりや安らぎを与える等の情操教育の場として大いに期待されている。

今回の設置にあたり、自然や生き物を学ぶ子供たちの良い教材になればと、近くの湿地で採取

した20種類の植物が移植され、近くの河川で捕まえた水生生物が放流されるなど、『ホタルがたくさん飛び交う空間になってほしい』と願いを込めて「ホタルの里ほのぼのひろば」と命名された。



7月に、区長会やむらづくり協議会に対し当該交付金事業の概要を説明するとともに、合わせてたたき台としての事務局(案)を提示し、意見を徴集した。ビオトープ設置直後から、これらの施設を活用して何かできないかという話しが公民館にもたらされた。

事務局(案)を基本として、関係機関と協議を重ねた結果、このビオトープを核とし富田跨線橋下の空間を一部利用し、隣接するJR越前富田駅の周辺を含めて、富田地区住民が集うことのできる「安らぎと憩いの場」として、一体的に整備を行うという計画を立て、区長会やむらづくり協議会に、『地域住民参加・協働による地域づくりの一助として、地域住民へ憩いの場提供と地域住民によるコミュニケーションの創出を図り、交流人口の1,200人増加を目指し当該事業を概ね3年間かけて実施する』という最終案を説明し承認を得た。



年度	事業実施内容
初年度	・ 休憩所の設置 ・ その他付帯工事
2年度	・ 観察小屋の設置 ・ JR越前富田駅舎右辺の花壇整備
3年度	・ 太陽光発電を利用した簡易照明の設置

また、ハードのみならず、当該一連施設を利用した自然観察会やホタル鑑賞会、花いっぱい運動等のソフト事業も展開し、以って地域の活性化に繋げていく予定である

4 事業の成果

最初の“地域住民参加・協働による地域づくり”のスタートとして、11月7日(日)午前8時30分より、松山和彦むらづくり運動推進協議会会長のあいさつの後、東屋の建設に着手した。



当日は、秋晴れに恵まれ、各集落の社会奉仕活動と日程が重なり参加者減が危惧されたにも関わらず、むらづくり運動推進協議会の中核を成す集落推進委員や支援と協力をお願いした各区長も参加し、「地域住民の憩いの場」の設置に向けて第1歩を踏み出した



東屋の建設には、専門的な知識と技術が必要とすることから、事前に建設部材の刻みと丁張・基礎工事を業者に発注し、また、安全面から、業者の指導・協力を受けながら作業を実施した。

当初は、ビオトープの“観察小屋”を予定していたが、観察小屋の建設には富田小PTAにも参加協力を依頼する予定から、今年度は事業実施期間も限られているため、東屋を先行実施とした。



翌週11月14日（日）には東屋の周りに、粉碎廃瓦の敷き込み作業を実施した。当日は、むらづくり講演会も開催されたため、講演会会場との二分化を余儀なくされたが、何とか10tの粉碎廃瓦を敷く作業を実施することができた。



なお、後日上野区長の協力により粉碎廃瓦の専用機械による転圧作業をしていただけたこととなった。

今回、区長やむらづくり協議会の集落推進委員の参加により、かねてから模索していた地域が一体となるアクションとして「地域住民の憩いの場」の設置に向けての第1歩を踏み出すことができた。

2週間にわたる一連の作業終了後、参加した区長や集落推進委員から、今後の管理のあり方についての意見が出され、来年度に計画を先送りしたビオトープ観察小屋も含めた施設一連の管理方法について、今後どのように進めていくのかといった協議がなされた。

その結果、非公式ではあるが、むらづくり運動推進協議会が中心となり、区長会、富田小学校、同PTA、富田公民館が参画した管理委員会を構築し、維持管理に係る費用も捻出しながら地域住民のために守っていくということを確認し合った。

現在の東屋については、雪に備えて既に雪囲いを取り付けてあり、実質的なオープンは来春となっているが、このように地域の活性化に繋げる施設の建設と、その将来にわたる維持管理についてまで協議が及んだことは、非常に意義のあることだと感じた。

5 今後の展望

公民館駐車場から、直に東屋が見えるため、地区住民からも「立派なものが見えたなあ。」とか「あれは何？」との問い合わせも寄せられている。事業内容を説明すると、「村の寄り合いで区長から聞いたあのことか。一帯をきれいに整備するらしいなあ。」と返事が来る。少しずつではあるが、地域の中にこの事業の趣旨が認識され、今後どうなるのかと興味を持ち始めた結果だと理解している。

今後は、ビオトープ（ホタルの里 ほのぼのひろば）において主に環境学習を実施する富田小

学校、同PTAにも参加を働きかけ、ビオトープを観察するための観察小屋を、むらづくり委員を中心として、引き続き区長や地区住民に参加・協力を呼びかけ建設する予定である。



さらには、このビオトープを核とし富田跨線橋下の空間を一部利用して、隣接するJR越前富田駅の周辺に花壇を造る計画で、これらを含めて、富田地区住民が集うことのできる「安らぎと憩いの場」として一体的に整備を進める予定である。

また、ハードのみならず、花壇の土づくりや花いっぱい運動をさらに推進するとともに、自然観察会やホタル鑑賞会等のソフトメニューも実施し、合わせて環境に対する意識の高揚と環境保全の推進、地域住民への憩いの場提供と地域住民によるコミュニケーションの創出を図り、以って地域の活性化に繋げていきたいと考えている。



ふるさと阪谷をよくする会

1 基本データ

- 地区名 阪谷地区
- 人口 1,692人
(平成23年1月1日現在)
- 面積 36.28km²
- 実施主体
ふるさと阪谷をよくする会
- 地区の沿革

阪谷地区は大野市の北東部、白山山系の経ヶ岳の麓に位置し、九頭竜川を挟んで富田地区、北は勝山市、東は五箇地区に接している。集落は18。昭和29年、阪谷村が大野市となる。

標高250m～500mの中山間地域で、大野市の中でも雪が多い地区である。

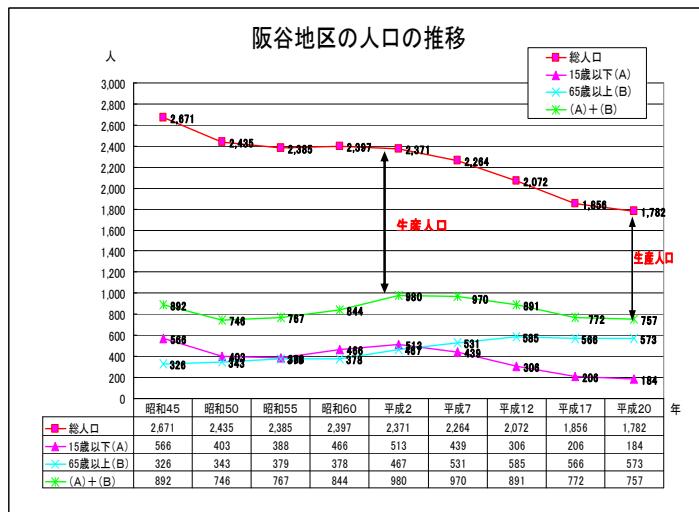
面積の2/3は山林。土地改良が進み、広大な棚田が広がっている。

福井県下スキー場の発祥の地、六呂師スキー場を始め、六呂師高原には、220ヘクタールを有する奥越高原牧場、自然保護センター、青少年自然の家等の県の施設や、トロン温浴施設うらら館、ミルク工房奥越前等の市の施設を有する。

温暖化やスキー人口の減少等により六呂師エリアの観光客は減少傾向にあるが、大野市の観光の一翼を担ってきた。



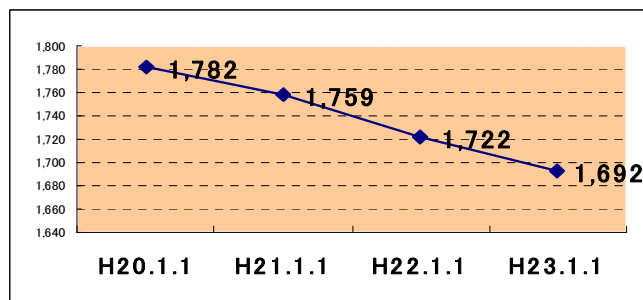
2 現状と課題



阪谷地区は、少子高齢化の進行により生産人口が著しく減少している。高齢化率は、平成22年4月1日現在で、平均32.8%。(参考：全国平均22.8%、福井県平均23.4%、大野市平均が29.00%)

このグラフが示す通り、昭和45年(1970年)に、2,671人だった人口が、平成20年(2008年)には、1,782人と、約40年間に1,000人減。比率で言うと、67%、1年平均25人減少している。246人だった児童数は、62人と約180人減少。比率で言うと、25%、1年平均4.5人減少している。

さらに下記のグラフが示す通り、平成21年～23年の3年間の平均は30人減と、近年減少化が加速している。



特に上阪谷(落合・堂嶋・金山・小黑見)で減少が顕著で、限界集落化している。

	転入	出生	転出	死亡	転居	計
過去3年	98	25	△123	△74	△16	△90
平均	33	8	△41	△25	△5	△30

10年後に限界集落になる可能性がある「準限界集落」も5集落あり、このような生産人口の減少が、集落の活力、しいては地域の活力の低下を招いている。

いかに他地区に誇れる産業、イベント、文化を創造し、活性化させて、生産人口の流出を食い止めるかが課題である。

また近年有機の里づくりの気運が醸成されつつある。平地より気温が1度から2度低く、経ヶ岳（1,625m）から吹き下ろす冷たく強い山風は、虫を追い払うのに効果があり、昔から有機栽培の土壌が培われてきた。そんな土地柄もあり、「スターランドさかだに」の建設を機に、「有機自然農法研究会」や「家庭菜園の味グループ」等、有機農業グループが活動を開始。更に平成20年度には、国の「地域有機農業推進補助事業」の認定も受け、本格的に有機の里づくりが始動した。

しかし、「有機の里」の気運の盛り上がりは、まだまだ一部に留まっており、今後この気運をいかに地域全体に広め、継続発展させ地域の顔としてブランド化させていくかが課題である。

3 事業の内容

これらの現状と課題を踏まえつつ、半年間で何ができるかを検討した結果、まず、既存のイベント「こだわり野菜を食するつどい」を充実させること、「限界集落化が進んでいる上阪谷の活性化」を検討することの2本を事業の柱とした。

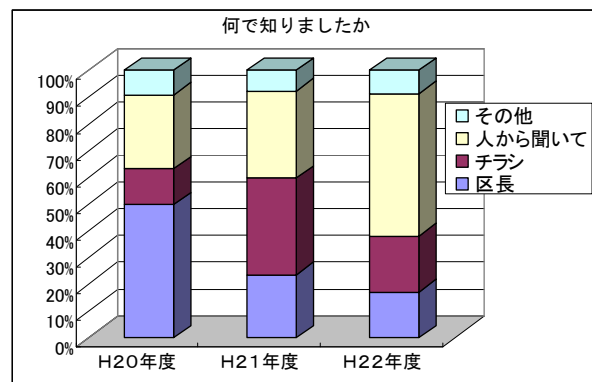
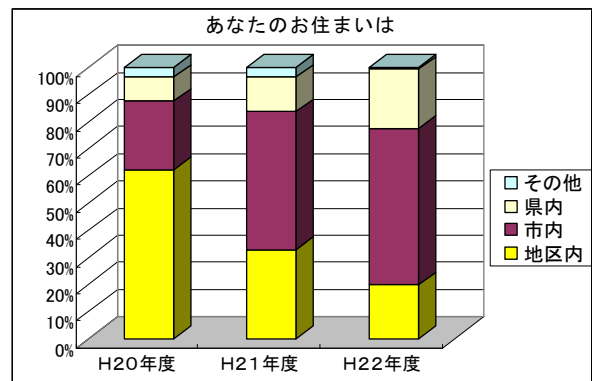
① こだわり野菜を食するつどいの充実

このイベントは、平成20年度、有機の里をアピールする一つの方法としてスタートした。

野菜作りから、調理まで全てを地区住民の手で成し遂げるこのイベントは、来場者の高い評価を得て、住民のやる気と元気、誇りを引き出した。

初年度は200枚の前売り券の販売だったが、3回目の今年度は400枚を販売。当日券を含めると約500人が来場。

地域住民に有機の味を知ってもらうことからスタートしたイベントが、わずか3年の間に半数以上が地区外から、それも口コミによって来場するイベントになっている。有機の里をアピールする絶好の機会ととらえ、このイベントをさらに磨きをかけ、広く地区内外に有機の里としての阪谷の魅力を発信することとした。



まず、毎回実施したアンケートの分析をおこなった。アンケートの回答率は約75%あり、

信憑性があった。

その結果、

- ① 「スターランドさかだにへの道が分かりにくい」
- ② 「待ち時間が長い」
- ③ 「地区内の観光施設に立ち寄らずそのまま帰ってしまう」

とういことが浮かび上がってきた。

次にこれらのことについて、どのように具体的に進めるかを話し合った。

- ① 「スターランドさかだにへの道が分かりにくい」については、市外からの来場者も増えてきており(21.7%)、今後さらに増えることが予想されることから、福井、勝山方面へのアプローチとして看板を設置することとした。



看板の設置場所を下見

- ② 「待ち時間が長い」については、ピーク時には最大50分の待ち時間となり、その不満は顕れた。そこで、待ち時間の緩和策として、会場であるスターランドの大野盆地が一望できる芝生広場で活用できるようにオープンテーブルセットを7セット購入し約30客席増やした。
- ③ 「地区内の観光施設に立ち寄らずそのまま帰ってしまう」については、折角阪谷に足を運んでくれたにも関わらず、車で3分、

10分の距離にある「白山やまぶどうワイナリー」にも、「六呂師高原」にも寄らず帰られる方が多く見受けられた。それらの方々は、時間がないというよりも、周辺の観光地に気付いていないように感じられた。そこで、地区内の観光施設(観光資源)をPRすべく、阪谷版観光パンフレットを作成することとした。

阪谷版観光パンフレット作成にあたっては、県内唯一のデザイン科である「福井工業大学デザイン科」に協力をお願いし、「地域づくりのあり方の考察と観光パンフレットの提案」と題して研究を委託した。大学からは5名の先生方と3名の学生が、当地区からは、地元観光事業所の関係者、青年サークルも加わり、今までに2回意見交換会を実施し、「今なぜパンフレットが必要なのか」を住民に問いかけた。



意見交換会の様子1



意見交換会の様子2

② 「限界集落化している上阪谷（落合・堂嶋・金山・小黒見）の活性化」

その方策として、里山文化に着目した。里山文化を体験、学習できるように整備し、桃木峠の大杉（大野市天然記念物、森の巨人100選）、金山遺跡と連携させた体験文化ゾーンを確立させ、交流人口を増やすことを掲げた。里山体験メニューとして、まず手始めとして陶芸の里を目ざすこととし、陶芸家の中村鐵遷（なかむらてっせん）氏（勝山市在住）の窯を視察し、地域の土にこだわることの重要性や地元窯の必要性を学んだ。



地元の粘土を混ぜこんだ器



1,200°Cに熱せられた窯を視察

さらに、陶芸に関心のある方を発掘すべく「陶芸の魅力」と題して講演会を開催。実際に中村氏の作品に触れながら陶芸の魅力を再確認した。



講演会の様子

4 事業の成果

7月の第1日曜日に実施される「こだわり野菜を食するつどい」。

平成22年度は終了していたが、平成23年度に向け、屋外用オープンテーブルや不足していたスリッパも整った。勝山方面からの看板と福井方面からの看板も整備された。

こだわり野菜の植え付けの春を迎え、関係者も今まで以上にやる気が見て取れる。

観光パンフレット作成においては、意見交換会を通して多くの住民が、「いかに阪谷が多くの人に溢れた恵まれた地であるか。」また、「いかにこの恩恵を無頓着に受け止めていたか。」に気づかされた。

これらを積極的に活用し連携して観光客を誘致しようという機運が生まれたことは大きな成果と言えよう。

また、陶芸の里づくりにおいては、やりたい仲間と指導下さる講師が見つかったことは大きな収穫であった。

5 今後の展望

こだわり野菜を食するつどいについては、年1回の開催から2回へと回数を増やすことを視野にいれていくべきだろうし、観光パンフレットを活用して、昼食バイキングから地域の資源

を活用した食育イベントに発展させることは可能であろう。滞在時間が90分を超えると消費が生まれると言われている。資源を連携させ、少しでも滞在時間を増やし、有機の里と結びつけた消費活動を展開し、地域の産業に結びつけたい。

陶芸の里づくりについては、上阪谷の空き家を活用したベースキャンプづくり、展示スペースづくりを進め、地元の土を発見し、地元で窯を持ち陶芸の里として交流人口を増やす。

文化が生まれ、交流人口が増え、消費が生まれ、産業が生まれ、市民力が高まり、地域が元気になる。今まさしく「地域づくり交付金」という鍵で、プラスのスパイラルの入り口を開けようとしている。「地域づくり交付金」はあくまで開けるだけ。そこを登るのは住民自身。

各種総会や女性のつどい等を利用して、積極的に「地域づくり交付金」を説明してきた。

「地域づくり交付金」を活用して、今阪谷地区が何かをしようとしていることは多くの住民に気づいてもらえたと思う。この気づきをいかに意識に高め行動に結びつけて地域を変えていくのか、2年目が正念場である。

五箇地区むらづくり推進協議会

1 基本データ

- 地区名 五箇地区
- 人口 69人
- 面積 146k m²
- 地区の沿革

五箇地区は、市街地から約8km東南の位置にあり、西は「日本百名山」の「荒島岳」、東は赤兎山と白山連邦、岐阜県に接し、面積は146k m²と広大な林野を占める地域。上打波、下打波、東勝原、西勝原の4集落からなっている。

- 実施主体

五箇地区むらづくり推進協議会



2 現状と課題

地区内には、スキー場（現在は閉鎖）やキャンプ場も整備され、名勝地「刈込池」や「仏御前の滝」、九頭竜川の「魚止め」等、風光明媚な景色が点在しており、訪れる旅行者のための民宿業も行われていた（現在は1件が営業）。

かつては、小・中学校やJAの支所も置かれていたが、相次ぐ災害やダム建設による移住による人口減少や各組織の再編計画の中で、順次役目を終え廃止されていった。



現在は、JR 勝原駅のある西勝原区を中心に、東勝原・上打波・下打波の4集落に36世帯69名が生活をしている。また、無雪期には、何人もの村人が市街地から畑や山仕事のため通っており、神社では祭りも催されている。通年在住者のうち65歳以上が44名と高齢化率（65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合）の進行が63.8%と顕著で、いわゆる“限界集落”となっている。

2007年に国土交通省から公表された限界集落の実態によると、全国には7,878カ所もの限界集落が存在し、今後さらに増加すると記されている。過疎の問題が言われて久しいが、当地区は市街地からも遠いこともあり、その解決策を見いだせないまま人口流失が続き、少子高齢化社会が到来してしまった。

このような中で、地区内においては、むらづくり推進協議会が実施する「花いっぱい運動」を通じ、JR 勝原駅周辺を季節の花で飾って五箇地区を訪れる旅行者を出迎えたり、近所の婦人

によって30年ほど前から植樹され、春になると“桃源郷”として注目を集め、満開の季節には遠く中京や関西から観光客が訪れるまでになるなど、「豊かな自然を活かした交流」を目指して、地域住民が一体となり“ふるさと五箇”の活性化に向けて取り組んでいるところである。



3 事業の内容

今では雑草が生い茂り埋もれかけているが、かつてはイワナも泳いでいたという八幡神社下

の湧水地の再生と、“桃源郷”と表現される花桃並木の延長に新たに植樹された花桃の若木の保全を、地域住民協働による故郷の環境保全と位置付け、これを核として、更なる「豊かな自然を活かした交流人口の増加」を図り、地域の活性化につなげていくことを目指すものである。

内容 年度	事業実施スケジュール(案)
平成22年度	○湧水地の再生事業・湧水地の草刈り・防草シート張り・遊歩道整備 ○花桃の保全事業・花桃40本、ツツジ、ヤマボウシ等約100本の樹木の雪囲い
平成23年度	○西勝原区内の用水路の整備 ○湧水地・花桃の管理保全
平成24年度	○西勝原区内の用水路の整備 ○湧水地・花桃の管理保全



まず、「八幡神社下湧水地の再生」として、池底に溜まった泥の浚渫を行い、湧水の池底からの自噴現象を間近で見られるよう護岸の一部を階段状に下げ、水面に近づけた遊歩道を設置するなどの整備を行う。次に、「花桃の若木保全」については、地区の婦人が植え始めた花桃に続けと、平成20年4月に地元有志をはじめとして、地区内外から趣旨に賛同した20名以上の方々が参加し、植樹した花桃の若木や、むらづくり推進協議会が緑化推進事業で植樹した、ツツジやヤマボウシ等の若木の保全を合わせて行う。



市内有数の豪雪地帯にあって、苦勞して植えた若木を何とか守っていきたいということで、幹が弱い欠点を補うため、これまで植えられた約 150 本近くの若木に雪囲いを施し、雪害から守るというものである。

4 事業の成果



去る 11 月 14 日 (日)、早朝より八幡神社下湧水地の整備に着手した。

地区の人にとっては、「昔ここでイワナをとった」とか、「養魚場から流れてきたニジマスを捕まえた」とか、そんな思い出がいっぱいつまった特別な場所であるらしい。

大きなケヤキの倒木の始末が大変で、チェーンソーで切断し運んだり、背丈以上に生い茂った雑草を草刈機で刈り取る等、大変な重労働であった。



八幡神社下湧水地



湧水地の自噴箇所

それでも参加者は、子どもの頃に遊んだ思い出の地の再生作業に没頭し、撤去後には水の中に“魚”が見られるなど、整備に向けての第 1 歩を踏み出した。

湧水地の池底にたまった泥を浚渫してかき出し、周辺にあった石を利用して自噴箇所を囲むように配置した。また、間近で自噴現象が見られるように、護岸の一部に階段を設けて道路から湧水地に降りられるようにし、合わせて周辺を散策できるように、丸太杭を用いた幅 50cm、長さ 23m ほどの遊歩道も整備した。



湧水地の遊歩道

11月30日(火)には花桃やツツジ、ヤマボウシの若木の雪囲い作業に着手した。当初は日曜日に予定していたが、あいにくの雨模様のため延期されていたものである。

好天には恵まれたものの、これまで毎年植え続けられてきたため樹木の高さが均一ではなく、しかも本数が半端なく多いこと、また、平日の作業となったことにより参加者が限られてしまったために手間取った。近くの山には雪が積もり、本格的な冬の到来がすぐそこまで来ているため、平日に関わらず天気の状態を見計らって、

各自が随時作業に参加し進めていくことを確認しあった。



5 今後の展望

八幡神社下の湧水地の再生と、花桃の若木の保全という、長い間地区の懸案事項であった当初の目的は達成できた。

今後は、整備した場所を地区の“宝”として、また五箇地区を訪れる人々が散策できる新たな憩いの場所として、この先10年・20年と受け継いでいかなければならない。そのためには、むらづくり推進協議会を中心とした、地区住民の手による適切な維持管理が不可欠である。『自分たちの共有の財産』であるという認識と、これを守っていくという取り組みが、“ふるさと五箇”の活性化に繋がり、交流人口の増加につな

がっていくものと思われる。

地区内には、まだまだ少し手を加えれば再生可能な埋もれた箇所がある。これらを一つ一つ吟味して再生してひとつの導線として描き、昔懐かしい自然に親しむツールとして活用していくのも面白いかもしれない。

過疎化が進む地区にあって、自然がそのまま残っているのが最大の強みである。

和泉自治会

1 基本データ

- 地区名 和泉地区
- 人口 595人
(平成22年7月1日現在)
- 面積 332平方キロメートル
- 地区の沿革

和泉地区(旧和泉村)は、福井県の東端に位置し岐阜県に境を接し、面積の約3分の2が山林であり、四囲山岳を形成し、その中央を岐阜県境に源を発する九頭竜川が東西に貫流している。また九頭竜川をせきとめた九頭竜ダムを始め、大小複数の人造湖を形成している。



九頭竜ダム湖

人口は昭和40年に5,723人であったが、昭和43年の九頭竜ダム完成や昭和62年の日本亜鉛鋳業中竜鋳山の採掘中止などが影響し平成2年には846人にまで激減した。この人口の絶対数の少なさ、豪雪地帯・山村地域という地理的条件、工業用地条件の欠如による魅力ある職場の少なさ、都市的生活環境整備の立ち遅れ等による若者の不定着により過疎化が進んできた。

このような中、旧和泉村では地域の特性を生かしたむらづくりの理念のもと観光と農林

水産等地域産業の連携による内発的地域振興を目指してきた。特に観光には力を入れ「観光立村」を掲げ、昭和40代後半より多くの観光施設の整備を行ってきた。「九頭竜国民休養地」や「前坂家族旅行村」、「天狗岩ファミリーパーク」などの保養施設やキャンプ場、また「九頭竜スキー場」も整備してきた。さらに平成に入り民間のスキー場(福井和泉スキー場)がオープン、さらに下山地区では、平成元年に試掘された温泉を利用し「九頭竜保養の里」を整備し、日帰り温泉施設、ホテル、コテージなどのリゾートゾーンを形成してきた。

交通網も岐阜県側で国道158号線に繋がる東海北陸自動車道が整備され、中京圏からの距離も短縮され「福井県の東の玄関口」と位置付けられるようになった。

和泉地区は中世から穴馬郷と称せられ、南北朝時代から江戸時代を通じて次々と支配者が変わり、天領として明治時代を迎えている。明治22年町村制実施に伴い上穴馬村、下穴馬村に分かれ、その後昭和31年9月30日に合併して和泉村となり、さらに昭和34年10月14日に石徹白村の一部を編入した。

そして平成の大合併により平成17年11月7日に大野市と合併し現在に至っている。

○ 実施主体

以前より地区内に、個人で花桃の苗を植樹している方がいたが、ある民放ラジオ局がPRと地域貢献を兼ね、何かしたいということから、地区の方に相談があった。その際に花桃の話が浮上し、企業と地元住民が協力し地域の活性化を目指すべく、花桃の里を作ろうということで話しが進んでいった。

そこで地元の有志を募ることとなったが、個人的にお願いにいくも、なかなか人材が集

まらず、自らの手で和泉地域の活性化とコミュニティの形成を図ることを目的とした自治組織「和泉自治会」に話をして賛同を得ることとした。

和泉自治会の賛同も得て、平成21年11月18日に民間企業と地元住民による自主事業団体「越前おおの・九頭竜 花桃回廊実行委員会」が、この地域に花桃の植樹・育成事業を図ることにより、観光文化拠点としての地域づくりに寄与することを目的に発足した。

これらを経て和泉自治会では、平成22年4月27日に長野県上伊那郡阿智村の「花桃の里」への視察研修を実施した。特に月川温泉「野熊の庄 月川」周りの花桃は見事で、多くの観光客が訪れ、イベントも開催されていた。

また国道256号線沿いの「花桃街道」にも多くの花桃がみられ、山際や個人宅の庭などにも植栽がみられ、地区全体が花桃で盛り上げようという機運が見受けられた。また、その地区も平成4年にインターチェンジが整備された場所ということもあり、和泉地区と似たような状況にあったため大変参考となった。



「花桃の里」視察

このように和泉自治会も実行委員会の目的に賛同し共通認識をもつようになり、実施主体である実行委員会の事業推進に協力することと

なった。

2 現状と課題

和泉地区は、合併後の5年間にも人口が約750人から600人弱にまで減少している。さらに大野市街地から約30kmの距離があり行政サービス低下への懸念や若者の流出により高齢化が進み地域力・マンパワー不足による地域の衰退、経済情勢の悪化による観光客の減など、当地区の将来への不安が増大している。

合併前は小さな自治体であり、昔から電源開発のダム事業や中竜亜鉛鉱業株式会社の鉱山など大きな税収等の恩恵を受け、決め細やかな行政サービスを受けていた。このような状況もあり住民が自ら行動を起こし自らの手で事業を行うという意識が薄く、行政に強く依存している状況であったといえる。

合併を機に、このような状況は一遍し、各種補助金の削減やこれまで無料だった公共水道料金の発生など、少しずつであるが依存体質から脱却しつつある。

しかしながら、今も自発的に物事を行うことや個人負担を伴うことに戸惑いを感じることもあり、さらに皆を率先していくリーダー的人材が不足している感がある。

○ 事業実施にあたって

和泉地区は中京方面からの玄関口として、大野市さらには福井県にとっても最重要な地域であり、近い将来の中部縦貫自動車道の開通に伴うインターチェンジの完成などにより交通の拠点となる。



中部縦貫自動車道予定（赤線）

その際、和泉地区が単なる通過ポイントとして埋没することなく、中京方面などから福井県を訪れた方が最初にインターチェンジをおりて立ち寄っていただける「観光拠点」を創造することが重要だと考える。

そこから地域内外の交流が生まれ、地域住民の自発的な意欲・行動が促され、地域力・市民力が向上していくことが期待できる。

その「観光拠点」は和泉地区の自然豊かな風土にマッチした心満たされる場所であり、癒しや休息、おもてなしの優しい心が表現された場所であればいい。

花木の植樹により花木で育む優しさと癒しを表す和泉地区ならではの「観光拠点」を創造することのみならず、継続的な育成事業により地域の活力を生む「継続的なふるさとづくり」が可能になる。

福井に入るとき帰るとき必ず立ち寄りたくなる。そんなエリアの創造を目指す。

3 事業の内容

- ① 平成 22 年春より 3 カ年計画（年間 500 本）にて、和泉地区で花桃の苗木の植樹を行う。
- ② 花桃の育成管理を行う。

- ③ 植樹は広く一般より参加（有料）を求め併せて集客イベントを行い、地元物産の PR や販売の機会を創出する。

4 事業の成果

① 花桃の植樹

平成 22 年 5 月 29 日、30 日の両日、同地区の九頭竜保養の里、九頭竜国民休養地、道の駅九頭竜周辺に約 500 本の「花桃の苗木」を植樹するために、県内外より約 1,000 人の参加者が集まった。家族連れも多く訪れ、子供たちもなかなか出来ない体験を和泉地区で行ったということで大人になっても思い出にのこる場所であってほしいと思う。



植樹風景



植樹した親子

植樹イベント当日は、ステージでの歌や踊りなど様々な催しを実施、また和泉の食材を生かした昼食など、参加者らは植樹と併せ和

泉地区の魅力を存分に満喫していた。さらに自らが植樹した花桃があることにより和泉地区に少なからず愛着がわき、将来にわたり当地区とのかかわりを感じていくことが期待できた。



和泉の食材を生かした昼食の提供

これにより当地区の魅力が地区外にも発信され、大野市の新たな観光地の創造に手ごたえを感じた。

② 花桃の育成管理

草刈、追肥、雪囲いなど植樹後の管理も非常に大切であり、実行委員会のメンバーやボランティアを募集するなどして随時行ってきた。

平成22年10月26日及び11月3日の両日には、来たる冬の雪に備え、苗木が雪で折れないよう延べ60名の参加を得て雪囲い作業を行った。参加者らは、専門家の指導を仰ぎ、竹と荒縄を使って雪囲いを設置した。本数が多くかなり大変ではあったが、参加者らは一本も雪に負けて折れたりしないよう丁寧に作業を行い、将来この地域が花桃でいっぱいになり、多くの方がこの地を訪れてもらえることに思いをはせていた。今冬はまれに見る豪雪でありみな心配したが、その心配をよそにほとんどの苗木が雪に負けず無事、冬を越せて

いる状況であった。

残雪の残る中、3月26日には雪囲いの撤去作業を行い、無事、春支度を整えることができた。



雪囲い作業

これらの作業を行うにあたっては、苗木の本数も多く実行委員会のメンバーだけでは実施が困難であり、造園業者などに依頼する資金もないという理由もあったが、この管理を通じて地域の活性化に繋がっていくことを期待し、ボランティアの花桃管理グループ「花桃ガーディアンズ」を募集して行うこととした。

和泉地区の住民だけでなく、地区外より多くのボランティアを募集することで、多くの方に和泉地区を知ってもらい、愛着が生まれる。さらに地元住民と触れ合う機会を創出することが大切であると考えた。

実際、ボランティアには和泉地区以外の方の参加者が多く、地元の方や初めてお会いした方などと協力して作業を行い、おしゃべりから小さな交流が生まれた。

これを機に地元住民の交友範囲も広がり、外部の情報を得ることや地域外の方の意見をきくことで、今後の地域の発展、また地域住民の意識改革に繋がっていくのではないかと感じとれた。



花桃ガーディアンズ

5 今後の展望

福井県の東の玄関口として、福井県に訪れた際、和泉地区のインターチェンジで降りたくなる魅力ある地域となり、当地区の花桃回廊目的の観光客が増加する。また植樹参加者が当地区に愛着をもちリピーターとなって訪れる。これらにより地区内での消費額も増加し、地域の産業・経済の活性化が図られる。

さらに、ボランティア団体「花桃ガーディアンズ」が花桃の育成管理を継続していく中で、その活動を通じて新たな交流やこれまで以上の深い絆が芽生え、また和泉地区の知名度が上がることにより、人々の意識も変わり、地域の活力を生み出す原動力となり、より活発に・より自発的に地域づくりに取り組む人々の輪が広がっていく。

6 地域力向上へ

平成17年の合併に伴い地区住民の間では、行政サービスの低下が懸念されている。これまで小さな自治体のため行政を身近に感じ頼りすぎている部分もあったと思うが、すぐに考え方を变えることは難しい。

今回の事業が行政に頼らず自主的に地域づくりに携わっていくという意識改革への転機にな

ることを期待したい。

その結果、地域にリーダー的存在の人物が発生し、そこへ自然と人が集まり結束し、地域を牽引する大きな力へと変わっていく。すなわち地域力が向上していくことに繋がってくものと確信している。